

赤十字NEWS

June 2011 Vol.853
<http://www.jrc.or.jp>

6



日本赤十字社

編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



つながることが明日を変える わたしたちは信じています

東日本大震災では「被災者のために何かしたい」という声がかつてないほど広がっています。そうした一人ひとりの思いをつなぐ懸け橋としての役割を担っているのが日本赤十字社です。この日赤の活動や理念を正しく知つてもらうためのキャンペーン「AKB48と一緒に『もっとよく知る赤十字!』」がスタートしました。世代を超えて日赤への理解と共感を広げていくことが期待されています。一方、5月中旬には世界の赤十字社代表が訪日。被災地訪問や支援活動の意志統一を行いました。世界の市民もまた、国境を超えて被災者につながっています。

記者発表会に出席したAKB48のメンバー（左から峯岸みなみ、板野友美、高橋みなみ、高城亜樹、渡辺麻友）の皆さん

CONTENTS

TOPICS	TOPICS	SPECIAL	AREA NEWS	WORLD
2 広報特使 藤原紀香さんが被災地でボランティア 第43回フローレンス・ナイチンゲール記章 日本から2名受章	3 AKB48と一緒に「もっとよく知る赤十字!」キャンペーンスタート 理事会審議報告・常任理事会開催報告・第77回代議員会開催公告	4 東日本大震災 世界の赤十字社・赤新月社が被災地へ 「東日本大震災・支援国赤十字社会議」開催	6 宮城・福島・岩手・埼玉・徳島 山形・東京・長野・鳥取・和歌山 スポーツとコラボ Voice & プレゼント	7 世界が復興へ歩んでいる 中国大地震から3年 ミャンマー巨大サイクロン被害から3年 Chernobyl原発事故から25年

クローズアップひと



岩手県遠野市でボランティアを激励

格闘家

武藏さん

赤十字の活動は自分の誇り

「赤十字の皆さんと一緒に活動できることを誇りに思います」

5月5~6日、赤十字広報特使の藤原紀香さんとともに、岩手県を訪れて東日本大震災で被災した方々を励ました。4月末にも陸前高田市で友人らと焼き出しを行い、今回が2度目の訪問です。

「被災した町を見て、初めは言葉を失ってしまいましたが、被災された皆さんの頑張っている姿に勇気をもらいました。微力ながら

自分にも何かお手伝いができると思って、またやってきました

武藏さんは、赤十字社連盟（現在の国際赤十字・赤新月社連盟）の創設に尽力した蜷川新博士のひ孫にあたります。「だから赤十字の活動を見ると、嬉しくなるんです」。

阪神・淡路大震災を大阪で経験。「神戸はもうだめではないかと思いましたが、立派に立ち直りました。だから、東北も必ず復興します。そのための手伝いを続けていきたい」

PROFILE

格闘家として1995年のデビュー以来15年にわたって、K-1リング上で世界中の強豪選手と戦い、昨年現役を引退。国内最高峰の大会であるK-1 JAPAN GPで4度優勝するなど、日本人最強選手として知られ、通称は「世界と戦うサムライ」。蜷川新のひ孫であることは自分の誇り」と語る。1972年生まれ、大阪府堺市出身。

赤十字
広報特使

©Ichigo Sugawara

「何かお手伝いさせていただい」とはいいが、自分にできることがあれば一步ずつやっていきたいと思いながら来ました」

赤十字広報特使の藤原紀香さんが東日本大震災で被災した岩手県各地を5月5日から訪問。避難所でボランティア活動を行いました。紀香さんの被災地訪問は4月中旬の宮城県に続いて2回目です。

藤原紀香さんが 被災地でボランティア

ホットタオルで 心も温か

遠野健康福祉の里(岩手県)では健康生活支援ボランティアの指導のもと、少量のお湯を使ったホットタオルの作り方や、スキンシップによるリラクゼーションなど、簡単にできる災害時高齢者生活支援講習を受講しました。

同市から50キロほど離れた海沿いの町、陸前高田市は今回の大震災で甚大な被害を受けました。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう活動に取

り組みました。「あつたかい

ね」「ホットするよ」。どの顔

もニコニコです。「講習を受

けて作ったホットタオルなど

が皆さんに喜んでもらえて、

本当によかったです」(紀香さん)。

高台にある特別養護老人ホーム「高寿園」には約100人

の施設利用者の方、被災した方々約200人が避

難。日赤の介護施設職員で構成する介護チームが支援活動

中です。

ここを訪れた紀香さんは高

齢の方々にやさしく語りか

けながら、ホットタオルを作

つて首筋に当てたり、足湯を

提供したりして、心と体をリ

ラックスしてもらう

「私たちと一緒に行動を!」

AKB48 高橋みなみさん



今回の震災で、私たちは当たり前にできることの尊さを知りました。おいしいご飯を食べられること、好きな

いま、自分に何ができるかを考え、私たちと一緒に行動をすること。まずは学んでいただけるとうれしいです。

東日本大震災の発災以来、日赤にはボランティアや義援金についての問い合わせが急増しています。問い合わせの中には、活動内容が正しく理解されていないために寄せられる質問も多かったことから、これまで以上に赤十字の活動をもつとよく知つてもら

AKB48は震災直後に義援金プロジェクトを立ち上げ、3月にファンから寄せられた募金などと合わせて6億円を募り、日赤に送金。チャリティーライ

金プロジェクトを立ち上げ、募金などと合わせて6億円を

募金などと合わせて6億円を

募金などと合わせて6

こころを重ねて

復興への希望をいま

救援金には一人ひとりの
気持ちが込められています

アメリカ赤十字社アジア・中東課長
マーク・プレスランさん

アメリカもハリケンや大竜巻などに度々襲われる災害多発国です。ですから、遠く離れた日本で発生した地震にも関わらず、国民が高い関心を示したのだと思います。

企業や組織だけでなく、多くの個人が行動を起こしました。ある中学生の女の子はバイオリンをワシントンDCの地下鉄駅で演奏し、募金を集めました。救援金には、こうした一人ひとりの思いが込められています。私たち全員が、被災者を大切に心配していることを伝えたいと思います。

今回の震災で日本赤十字社が優れた対応を示すことができたのは、過去の災害救護から学んだ経験を生かせたからだと思います。私たちも、今回の日赤の経験をこれから災害対策、救護に生かさなければなりません。



感動的な日赤の救護活動の
経験を世界で共有したい

中国紅十字会対外連絡部長
ザン・ミンさん

2008年に四川省などを襲った中国大地震では、日本から大きな支援をいただきました。その復興支援が続く中での東日本大震災です。多くの中国国民が心を痛め、「今度は私たちが支援しよう」と募金活動を取り組みました。中国紅十字会には募金とともに「被災者の皆さん頑張れ」「一日も早い復興を」などの声が寄せられています。

今回、日本は地震と津波に加えて原発事故という経験したことのない事態に見舞われました。非常に困難な状況下で日赤が救護活動を展開していることに、私たちは深い感動を感じています。こうした日赤の活動は、今後に生かさなければなりません。そのためにも、今回の日赤の経験と教訓を私たち全員が共有する必要があると考えています。



自分の問題として
フィンランド国民は考えました

フィンランド赤十字社事務総長
クリスティーナ・クンピラさん

地震への備えを行い、科学技術も進んでいる日本がこれほど被害を受けたことは大変な驚きでした。同じ先進国の一員として、多くのフィンランド国民は、今回の震災を自分の問題として受けとめざるを得ませんでした。

それだけに被災者に対しては、心のこもった善意が数多く寄せられました。高齢者施設で暮らす90代の女性が「今年は自分の誕生日プレゼントはない」とおっしゃっていました。



困難に耐える被災者の姿に
人間の強さを感じています

スイス赤十字社国際部長
マーティン・ファーラーさん

今回の震災ではスイス赤十字社が国民に寄付を呼びかける前に、救援金が続々と寄せられ始めました。過去の災害ではなかった特徴です。

地震と津波に加えて、原発事故が深刻な被害をもたらしたことで、「(スイスにも原発があり)人ごとではない」という不安を国民は感じています。それが寄付の広がりにつながったともいえます。

マスコミ報道では、避難所の生活も報じられています。それを見た方から「私の寄付を、避難所生活の負担が大きい高齢者の支援を使って」という申し出もありました。

がれきに埋もれた町の中で、不便な生活に耐える被災者の姿に、私は人間の強さ、素晴らしさを感じています。一日も早い復興へ私たちは協力を惜しません。



世界の赤十字社・赤新月社が被災地へ

日本国内だけでなく、世界に大きな衝撃を与えた東日本大震災。海外の赤十字社には、各国の市民から多くの救援金が寄せられ、日本赤十字社はそれらを活用した被災者支援を進めています。その支援内容の確認と被災地視察を行う「東日本大震災・支援国赤十字社会議」が5月9日から11日まで日本で開催されました。

海外の赤十字社から日赤へ寄せられた救援金は5月23日在で約230億円。さらに今後総額で300億円超が寄せられる見通しです。この救援金に基づき日赤は、仮設住宅入居者への生活家電セット寄贈事業などに取り組んでいますが、今後は大きな被害を受けた地域医療の復興支援、社会福祉施設などへの福祉車両寄贈事業なども進める予定となっています。

初日の会議には、20カ国・地域の赤十字社などから41人が参加。海外救援金を活用したこれらの被災者支援の内容を確認するとともに、震災後は日赤の救護活動やボランティア活動などについての報告を受けました。



分野	事業	予算
医療インフラの 応急復興支援	●石巻赤十字病院を含む石巻市周辺の医療インフラが、本格復興するまでの間の応急復興支援	約50億円
被災者の生活 再建支援	●避難所の環境整備事業(給水設備の設置、空気清浄器などの整備など) ●応急設置住宅への生活家電セット寄贈事業(建設が進められている仮設住宅7万~8万戸等) ●福祉車両寄贈事業(要介護高齢者、障がい者等に対するサービスなどのアクセス手段の提供) ●介護用ベッド整備事業(特別養護老人ホーム、介護老人保健施設など)	約225億円
その他	●救援物資の購入・補充(毛布、緊急セット、パーテーション等)の購入補充、保管倉庫の設置など ●医療救護班活動の充実(仮設診療所設備の更新など)	約25億円

※ 下線部分は既に事業に着手し、被災地に着手始めています。

「変化」に対応したグローバルネットワークの強化を

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC) ベケレ・ゲレタ事務総長

— IFRC として今回の震災をどうとらえていますか?

地震と津波に加え、原発事故が発生したことでの新しい災害状況が生まれました。これが、震災対策の進んでいた日本で起きた点に注目しています。世界が衝撃を受け、「災害への備えを強化すべきだ」という喚起を人々に与えました。

— こうした事態への日赤の対応をどう評価しますか?

早期の救護活動やその後の被災者支援など大変に素晴らしいものでした。世界の赤十字の手本といえます。日赤からの支援要請を受けなかったにもかかわらず、各国赤十字社が自動的に救援金募集に取り組み、多くの救援金を寄せた点について、世界の赤十字の連携する姿を示せたと評価しています。

— 今後の課題はありませんでしたか?

今回、海外の個人や企業から日赤へ直接、救援金が寄せられるケースが目立ちました。従来の国際的な救援金送付の仕組みでは、自国の赤十字社へ寄付を行い、それがIFRCを通じて被災国赤十字社へ渡されました。しかしオンライン募金などネットの発達で、

世界の人々と被災国赤十字社が直接つながれる環境が生まれているのです。そうした「変化」が今回の震災で浮き彫りになりました。そこに対応した新しいルール作りは課題の一つといえるでしょう。

— 赤十字の国際的ネットワークの生かし方という点も会議では議論になりました

国際赤十字は世界レベルでの災害対応システムを持っています。しかし、各国赤十字社の災害対応能力、政府との関係で与えられた各社の役割分担には、国ごとに大きな違いがあります。それを踏まえた上で、グローバルネットワークを維持・強化する必要があるのであります。例えば、北アフリカのチュニジア赤新月社は、海外からのあらゆる支援を調整する役割を政府から与えられていますが、IFRCにはその活動をサポートする準備がありません。このようなケースをも想定し、赤十字の災害対応システムを効果的に機能させる努力が求められていると考えています。





患者さんや薬剤師の笑い声が避難所を明るく照らします

東日本大震災 笑顔を運ぶ移動薬局メロンパンチーム巡回中！



宮城 2011.4.26

慢性疾患を抱える被災者へ処方薬を届ける移動薬局「メロンパンチーム」が宮城県石巻市で活動中です。チームは、石巻赤十字病院で調剤された薬を避難所へ届けるのが任務。道路事情に詳しい病院職員と3、4人の薬剤師で構成され、薬の配達や服薬指導、「おくすり手帳」の作成などを行っています。

チームは発災10日後に結成。移動式パン屋のように人々に喜びを届けようという思いから「メロンパンチーム」と名付けられました。全国の赤十字病院から派遣された薬剤師が参加し、毎日2チームが巡回を続けています。患者さん一人ひとりへの声かけを通じて、笑顔と元気を運ぶのもチームの役割です。

4月26日、石巻赤十字病院の岩渕薬剤師のチームは6カ所の避難所を訪問しました。薬を受け取った国分あや子さんは「薬剤師さんとお話しすることでストレス発散になります」と笑顔。櫻井君雄さんは「おくすり手帳を被災後初めて作ってもらえて良かった」とほっとした表情を見せました。

岩渕薬剤師は「薬剤師として、医療人として、そして人間として何ができるのか。こういう場所でなければ経験できないことの中から多くのことを学んでいます」とやりがいを語っています。

HPへ



学校は39人の新入生を迎え、6月1日から石巻専修大学の校舎で授業再開

東日本大震災 「赤十字理念」支えに学生が避難所で看護活動



宮城 2011.3.11

石巻赤十字看護専門学校（宮城県石巻市、飯沼一宇校長）の教員と学生が震災直後、避難先小学校で看護活動に奮闘。工藤三枝子副校長は「物がない中で工夫を凝らしたり、相手を理解することの大切さを学んだ学生たちは、人道・公平という赤十字の原則を実践できる看護師に育ってくれると思います」とその活動を振り返っています。

同看護専門学校が震災に襲われたのは、1、2年生79人が授業を受けている最中のこと。学生は教員の指示で学校から100メートルほど離れた湊小学校に避難し全員無事でしたが、津波は看護学校だけでなく避難先の湊小学校にも押し寄せ、1階部分が水没する被害を受けました。

小学校には付近の住民も避難していました。教員たちは溺れて運ばれた被災者の体を温めたり、動けない方のトイレのお世話をしたりと不眠不休の看護活動。学生たちも看護の手伝いに避難所内を駆け回りました。食料や水が不足する状況下での活動は3日間続き、教員と学生が小学校を出られたのは14日の夕方。工藤副校長は「赤十字看護師として、また赤十字看護師を目指す者としての使命感が活動を支えたと思います」と全員の奮闘を讃えています。

東日本大震災 笑いで震災乗り越えよう チャリティ寄席開催



「落語がしたくて、うずうずしていました」とみそ家笑遊さん

みそ家笑遊こと川越俊哲さんら福島素人落語の会のメンバーが4月30日、日赤福島県支部と協力し、震災支援イベントとしてチャリティ寄席を開催しました。

福島素人落語の会では、5月に落語会を予定していましたが、震災の影響で中止に。そうした中、「少しでも笑顔を届けたい」と福島県支部に企画を持ち込み、今回のチャリティ寄席を実現させたものです。会場となった福島市内の御倉邸には入りきらないほどの方が来場。中入りでは、救護服を着た赤十字のスタッフが高座に上がり、震災での救援活動などを紹介しました。

HPへ

巨人軍「赤十字応援デー」 坂本選手リーダーに訴え

東京 2011.5.25



東京ドームで5月25日に開催された巨人対ホークス戦は「赤十字応援デー」。訪れたファンに向けた赤十字活動のPRが繰り広げられました。読売巨人軍の「赤十字支援プロジェクト」は2008年スタート。4年目となる今年は、東日本大震災の被災者支援がテーマです。被災地のパネル写真展示や職員による救護活動報告のほか、ゲート前では文京区赤十字奉仕団員らが「赤十字応援ステッカー」を配付したり、寄付を募りました。試合前には赤十字支援リーダーの坂本勇人選手（写真左）が「チャリティートートバッグ」をファンに販売し、赤十字支援を呼びかけました。

東日本大震災 スマトラの 恩返しを被災地で



「被災者には、こころのケアが大切です」とスワルティさんは語ります

「支援してくれた日本に恩返しを」——2004年のスマトラ島沖地震・津波災害での救護活動経験を持つ姫路赤十字病院のスワルティ看護師（ジャワ島出身）が4月24日から28日、救護班員として岩手県山田町での活動に参加。看護の合間に故郷インドネシアの歌を披露するなど、被災者を励ました。

スワルティ看護師は、日本とインドネシアとの経済連携協定（EPA）に基づく外国人看護師候補者の受け入れ事業で3年前に来日。今年3月、日本の看護師国家試験に合格しました。被災者からは「彼女の頑張りを目の当たりにして、私たちも頑張る気持ちが湧いた」という声が聞かれました。

HPへ

Sports スポーツとコラボ

赤ヘルファンの球場 献血PRで赤十字一色に

広島 2011.4.17



がと
応救
け
援護
ん
タ服
け
ン
の
つ
ス
新
ち
入
や
職
員
一

広島東洋カープと広島ライオンズクラブの協力を得た献血への呼びかけが4月17日、プロ野球セリーグ広島対巨人戦の行われたマツダスタジアム広島で実施されました。球場周辺では、広島ライオンズクラブの会員らが、続々と詰めかけるカープファンに献血への協力を声かけ。カープの石原慶幸選手会長はスタジアム内の大型ビジョンで「献血に協力しよう！」と訴えました。

この日は、試合開始までに献血会場に108人が足を運び、うち70人が献血。また、広島県支部による赤十字事業の紹介コーナーも企画され、東日本大震災の写真などに多くの人が足を止めました。

赤十字運動月間 もっと身近に赤十字 イベント開催しPR!



長野 烟取 和歌山 2011.5.3~8

毎年5月は「赤十字運動月間」。赤十字の活動や理念をより多くの市民に広げていくためのイベントに今年も各地で取り組みました。

長野県支部は5月7日、「赤十字フェスタ in 長野」をJR長野駅前で開催しました。東日本大震災と長野県北部地震での医療救護活動を紹介したパネル写真や被災地に送った救援物資を展示し、災害時に赤十字が果たす役割をPR。来場者からは「被災地での活動を知ることができて有意義でした」などの声が寄せられました。

世界赤十字デーの5月8日に「赤十字ふれあい広場」を開催したのは鳥取県支部です。会場となった日吉津村のショッピングセンターを訪れた買い物客らに、東日本大震災での救援活動紹介や赤十字クイズ、「救急法体験コーナー」などを通して赤十字への理解と協力を呼びかけました。

和歌山支部が5月3日に和歌山市内で開催した「第4回赤十字ふれあい広場」では、支部職員に加え地元ボランティア50人が募金活動などに奮闘。このイベントにあわせて赤十字奉仕団員約2500人も、県内各所で街頭募金や清掃活動などに取り組みました。



鳥取県の「広場」に設けられた応援ボードには、被災地へのたくさんのメッセージが

※ HPへ の表示があるものは日赤ホームページ(www.jrc.or.jp)で詳細をご覧いただけます

Voice & プレゼント

元気もらった

スワルティさんの笑顔

辻本英子（奈良県桜井市）

看護師試験に合格したインドネシア人のスワルティさんが被災地の救護班活動に参加するとの記事を読みました。テレビのニュースでも取り上げられていましたね。被災された人の話にあいづちをうち、皆さんを励ましていたスワルティさんの笑顔と優しさを見て、私も元気をいただきました。

熱を入れたいボランティア活動

三輪夕奈（群馬県富岡市）

私は学校でJRC（青少年赤十字）部に所属していて部長を務めています。この間は、学校で東日本大震災のための義援金を集め、寄付しました。赤十字新聞を読んで、今は特にボランティアが大切な時なのでより一層赤十字活動に熱を入れていきたいと思いました。

プレゼント応募方法

「赤十字新聞」や赤十字活動へのご意見や感想などを下記までお寄せください。毎月抽選で素敵な赤十字グッズをプレゼントします。

★今月号のプレゼント

A K B 48メンバーのサイン色紙を2名様に

●郵送／〒105-8521

東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社企画広報室

赤十字新聞6月号プレゼント係

●FAX／03-3432-5507

●メール／koho@jrc.or.jp

(件名／赤十字新聞6月号プレゼント応募)

●応募締切／6月27日（月）必着

●お名前、ご住所、電話番号、希望プレゼント名と

赤十字新聞の感想をご記入のうえ、ご応募ください。

匿名希望の際はその旨もご記入ください。

当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



東日本大震災 被災地で泳ぐ鯉のぼり 深谷から応援 メッセージ



埼玉 2011.4.29

川口小学校元校長の桑原昭さんは
「今度は私たちが勇気づける番です」

深谷市赤十字奉仕団は、震災で大きな被害を受けた岩手県田野畠村へ大小27匹の鯉のぼりを贈呈。4月下旬から5月上旬にかけて同村立田野畠小学校に掲げられ、被災地の子どもたちを励ました。

鯉のぼり贈呈は、深谷市に合併された旧川本町と田野畠村とが友好都市の関係だったことから実現。同赤十字奉仕団は、深谷市PTA連合会や7年前の中越地震で被害を受けた新潟県長岡市立川口小学校の協力も得て、市内外から鯉のぼりを収集しました。田野畠小学校5年生の佐々木陽香さんは「今年は鯉のぼりを見られるとは思っていなかったのでうれしいです」と笑顔を見せました。

東日本大震災 徳島・山形県支部が 共同で炊き出し



宮城 2011.5.12~13

被災された方々に喜ばれた阿波尾鶏の
唐揚げとわかめしらすご飯

「こんなに、んめもの、久しぶりに食べたさ～」。徳島県支部と山形県支部の地域奉仕団員ら26人が5月12、13日、宮城県気仙沼市の小原木中学校避難所で合計1800食（450食×4回）の炊き出しを共同で行いました。

徳島県支部は被災された方々に元気になってほしいと徳島県産の食材を使った炊き出しを計画。被災地を継続的に支援していた山形県支部に相談したところ、共同で実施することになりました。2日間のメニューは阿波牛の牛丼、阿波尾鶏の唐揚げ、ネギトロ丼など。温かい食事や生鮮食品をほとんど食べられなかった避難所の方々からは、満面の笑顔と拍手が沸き上りました。 HPへ

原発の風評被害を 防ごう マスコミ関係者に訴え



福島 2011.4.29

黒い雨に濡れたトマトを、洗って食べた
記憶が沖田医師にはあるといいます

原発事故による風評被害の拡大を防ぐための「放射線の基礎知識セミナー」が4月29日、福島県内で開催されました。緊急被曝アドバイザーとして福島県に派遣された広島県赤十字血液センター所長の沖田肇医師らがマスコミ関係者を対象に開いたもので、8社から16人が参加しました。

広島に原子爆弾が投下された時、3歳だったという沖田医師は「広島の人たちを苦しめたのは差別や偏見。偏見は正しい情報がないところから生まれ、人の心を傷つけます」と熱弁。「危険区域以外の微量な放射線に対する過剰な反応は必要はありません」と強調し、冷静な報道を呼びかけました。 HPへ

「救援のために水を運ぶ婦人の像」日赤看護大学で除幕式



東京 2011.5.11

「末永く愛される像になつては
しい」
(彫刻家の岩田さん)

日本赤十字看護大学広尾キャンパス（東京・渋谷区）の前庭で5月17日、彫刻家の岩田実さん

さんが制作したブロンズ像「救援のために水を運

ぶ婦人の像」（高さ約1.6メートル）の除幕式が行われました。像は「ソルフェリーノの戦い」（1859年）で倒れた傷病兵に敵味方の区別なく水を届け、赤十字創設のきっかけとなった農村の女性たちをイメージして作られたもの。2007年に日赤本社へ寄贈された1体目に続くモニュメントです。

建立プロジェクト実行委員会の宮本悠美子さんは「看護師になる学生たちが学ぶキャンパスに像を建てることができて嬉しい」と喜びを語りました。



世界が復興へ歩んでいる

中国大地震から3年 赤十字が支える街の復興 「今度は私たちが支援」と日本へのエールも

死者・行方不明者8万7000人以上という大被害をもたらした2008年5月の中国大地震から3年。日本赤十字社をはじめとする世界の支援などにより被災地は着実に復興への道を歩んでいます。

学校、病院などの完成相次ぐ

中国大地震では、人々の生活基盤である住宅はもとより、学校や医療施設など多くのインフラが破壊されました。こうした事態に、国際赤十字・赤新月社連盟

(IFRC) や各国赤十字社などは、中国紅十字会とともに住宅や学校、病院・クリニックの再建などの支援を続けてきました。国民から寄せられた約51億円の救援金を基に日赤も復興事業を展開。学校30校のほか、39の病院や56のクリニック

の再建を支援し、現在までに学校の7割、病院の9割が完成しました。

日赤の支援は、辺境地区や少数民族地区も多く含まれます。そのために工事が遅れた案件もありましたが、5月10日には再建校最大の喬庄中学校（四川省）も完成。すべての支援事業の今年度中の終了を目指して、工事が進められています。

「強い気持ちで困難に打ち勝って」

3月11日に発生した東日本大震災は、中国大地震の被災者にも深い悲しみを与え、日本の被災者支援に向けた活動が各地で取り組まれています。

日本の再建支援を受けた学校や病院では児童や教員、職員が募金活動を実施。集まった救援金は四川省内だけで100万元（約1300万円）に達しました。

4月26日に竣工式が行われた四川省の碾盤小学校の児童たちは「私たちのこころは日本の被災者の皆さんとつながっています」と喜びを語ります。



完成した校舎の前で日本の被災者にエールを送る
碾盤小学校の児童たち



「強い気持ちで困難に打ち勝って」という横断幕を掲げました。同校5年生の秦君さんは「日本の友達が苦しんでいるのは本当に悲しい。でも強い気持ちで困難に打ち勝ってほしい。私たちも乗り越えました。日本の友達のためにできることは何でもしたい」と語ってくれました。

ミャンマー巨大サイクロン発災から3年 被災者の日常に戻った笑顔 復興支援事業が7月完了

死者8万4500人、行方不明者5万3800人、被災者240万人以上——2008年5月、ミャンマーに同国史上最悪の被害をもたらしたサイクロン・ナルギス。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)の3年にわたる復興支援事業が、今年7月の終了に向け総仕上げの時期を迎えています。日本赤十字社の支援した学校再建も全60校が完成しました。



再建された個人用住宅と喜ぶ家族

IFRCは13県・地区の10万人の被災者を対象に住宅再建や生計再建、災害対応、保健衛生の分野で支援を進めてきました。個人住宅支援ではこれまでに1万2400世帯の再建が完了しています。

住宅支援を受けたDaw Thein Htweさん（43歳）は「住んでいた家がサイクロンで崩壊。仮の住まいは狭く、7人の子どもたちのうち何人かを親戚の家で寝泊りさせていました。今は支援を受けて再建した家で家族全員と一緒に安心して暮らせます」と喜びを語ります。

生計再建事業では1万9300人とその家族が農業や牧畜、漁業の生業再開のための支援を受けました。

漁業用ボートを受け取った漁民のU Khin Maung Naingさん（37歳）は「洪水後はボートを借りて漁をしていましたが、賃料で収入の大半が消えてしまいました。今は貯金もでき、一番下の子どもを学校に行かせることができます。この状態が続ければ上の2人の子も通わせられそうです」と笑顔を見せます。

全60校の日赤支援校が完成

日赤はIFRCを通じた支援に加え、2009年4月からミャンマー赤十字社との2国間事業として60校の学校再建を支援。2011年3月までにすべて完成しました。新校舎は村で唯一の鉄筋コンクリート製で、床が高い防災強化型です。普段は児童の安全な学び場であると同時にサイクロンなどの際には避難所



新校舎で勉強する生徒
©Masako Imaoka/MRCS/JRCS



としても活用されます。

IFRCは今後もミャンマー赤十字社を中長期的に支援し、その発展をめざす体制をとっています。

チェルノブイリ原発事故25年 教訓生かし 国際赤十字として対策を

旧ソ連のチェルノブイリ原子力発電所事故から25年。その節目の年に発生した福島第1原発の事故により、安全対策や周辺住民の健康問題に改めて国際的な関心が集まっています。国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の近衛忠輝会長（日本赤十字社社長）は「事故の教訓を共有し、国際的な備えの充実を」と訴えます。

健康調査や治療を支援

実験中に原子炉が爆発した1986年4月のチェルノブイリ原発事故では、被曝により多数が死傷。現在も半径30キロ圏内への立ち入りが禁止されています。

IFRCは、周辺地域の住民を対象にした甲状腺がんや乳がん検診などの人道支援

活動を1990年からスタート。日赤はこの取り組みを支援してきました。

原爆被曝者の治療経験を生かした支援も行われています。広島赤十字・原爆病院は、医師会などと共同で「放射線被曝者医療国際協力推進協議会」（HICARE）を1991年に設立。ウクライナなどから研修生を受け入れ、被曝者医療を担う人材を育ててきました。

人道的見地からの注意を喚起

ウクライナの首都キエフで4月下旬に開催された「チェルノブイリ25周年国際会議～未来のための安全」には、各国政府や国連機関などが出席。原発の安全問題などについて議論しました。この中でIFRCは「被曝の危険がある地域住民のケアなどに人道的見地から関心を持ち、できる限りのことをやるべきだ」と問題



提起しました。

赤十字の使命のひとつである災害救援の一環として、原子力災害時に赤十字としてどのようにできるかを検討するべきだとの意見は、日赤をはじめ各国赤十字社内で強まっています。今年1月にスイスのジュネーヴで開催されるIFRC総会や赤十字代表者会議などに向けて、さらに議論が深められる予定です。



IFRCによる住民の甲状腺がん検査が今も行われている